

令和3年度(2021年度) 自己評価結果公表

社会福祉法人ふじみ野会

子どものその幼保連携型認定こども園

1. 本園の教育・保育目標

子どものその保育生活協同組合から50年余り積み重ねてきた保育実践をもとに、一人ひとりの子どもを大切に、自然のなかで友だちと感動を共有してあそび、子どもたちが人とつながり生きる力を育てることを念頭に保育実践を行う。

平成27年4月から幼稚園機能と保育園機能を併せ持つ幼保連携型認定こども園として一体的な教育・保育を行う。

【私たちの願い(教育保育理念)】

豊かな自然	自然の中でのびのびと子どもを育てます
あたたかな人間関係	おとなの愛情と仲間の中で子どもを育てます
本物の文化やあそび	豊かな文化やあそびの中で子どもを育てます
地域とともに	園と家庭・地域が一緒になって子どもを育てます

【私たちのめざす子ども像(教育保育目標)】

- ◎友だちと思いきりあそび、自分の気持ちを素直に表現でき、人とつながって生きていく子ども
- ◎何にでも興味・関心を持ち、自分でやってみようとする子ども
- ◎失敗を恐れずに挑戦し、仲間とともに学び、その経験を生かす子ども
- ◎あそびの中でからだを動かす楽しさがわかる子ども
- ◎生活習慣を身につけ、健康な生活ができる子ども

2. 本年度、重点的に取り組む目標・計画

【重点目標】

- ◎幼保連携の特色を生かした保育・教育内容の構築に努める。
乳児期はあたたかい人間関係の中で安心して過ごし、自我の芽生えを大切にする。
幼児期は、大人の愛情を受け、自然の中で仲間と交わりのびのび遊ぶ中で自己肯定感を育てる。
- ◎幼児中心の子育て支援の取り組み(うさぎの広場)だけでなく、乳児を中心とした子育て支援(赤ちゃんのつどい) プレ保育の残り組みを始め、地域の未就園児の保護者を支えていく。
- ◎新型コロナウイルスの感染対策をしっかり行いながら、園児の安全と、通常の日常生活、行事を出来る限り行えるようにする。

3. 評価項目の取り組み状況

評価項目	取組み状況
教育・保育内容について	<p>乳児担当の職員はチームワーク良く子どもたちの日々の成長を丁寧にみていった。0歳児クラスでは、少しずつ園児が増えていき、その中で、高月齢の子が1～3月生まれの子に気持ちを寄せていく姿と子ども同士の気持ちの交流に感動し、乳児期の友だちのかかわりやつながりの芽生えを実感した。</p> <p>幼児期の子どもたちは、今年度も、新型コロナウイルスの影響で、分散登園を行ったり、3学期のオミクロン株の感染が拡大した時期には、数クラスが学級閉鎖になったりと、例年通りの保育が行えず、保育内容についても見直さざるをえなかった。</p> <p>それでも、職員同士で話し合い、前年度よりは、園の行事が行える事も増え、コロナ禍の中でも子ども達の為に、出来る事を話し合い対応してきた。安心した園生活を送る中で、自分の気持ちを周りの大人やクラスの友だちに受け止めてもらい、自己肯定感を土台に意欲的に活動する姿を実感した。</p> <p>例年行っている異年齢の交流は今年度も難しかったが、そんな中でも、出来る範囲で交流し、年長組へのあこがれの気持ちや小さい子どもへの優しい気持ちが育ってきている。やがて遊びの中で培った総合的な力を学びの力につなげていくことを意識しつつも、急がずじっくりと育てることをこころがけた。</p>
教育・保育内容の保護者への周知	<p>毎月、各クラスや各年度で作るカリキュラムで、子どもの姿やその月に取り組む全体的な保育内容を伝えている。さらに日々のクラスや子どもの活動の様子をクラス新聞で伝え、節目ごとのクラス会で直接話し合う機会を設けた。</p> <p>3学期に予定していたクラス会が中止になった代わりに、幼稚部では、担任が園児の家に電話をし、保育部は、お迎えの保護者に担任が個人面談を行い、一年間の成長を伝える事が出来た。</p> <p>ホームページでは、写真だけではなく、クラス新聞も載せるようにし、園の保育方針を保護者に伝えるような働きかけを行った。</p> <p>それでも、保護者と一緒に行っている夏祭りや親子その祭りなどが行えず、例年より保護者と関係は薄くなっていたように思える。</p>

<p>給食と食育</p>	<p>多様な食物アレルギーに対応する中、ヒヤリとする場面を無くすためアレルギーカードを記入式に変えて3年目になった。給食室側と保育側の双方が記入し互いにチェックすることでミスは大きく減ったが、それでも数回のミスがあり、その都度、職員でミスが起きた原因や今後の対応策について話し合ってきた。毎月給食委員会を開き保育現場との意見を交流し、メニューの改善も行った。</p> <p>昨年度は出来なかった旬の食材の枝豆やトウモロコシなどの皮むきなどを、感染対策を行いながら、クラス単位で体験させることが出来た。</p> <p>年長組は、自分たちで野菜を育て、収穫し、野菜が出来るまでの課程を知るなど食育の取り組みも行った。</p>
<p>教職員同士の協力・連携</p>	<p>幼保連携を進めるため今年度も幼児クラスは幼稚部・保育部の担当が合同で話し合う年度別会議をできるだけ週1回行うようにした。その中でそれぞれの子どもに配慮する場面や幼保一緒に保育する場面など、認定こども園ならではの特徴と留意すべき点を話し合い、互いの理解を深めていった。</p> <p>若い職員にとって、年度別会議は少人数で自分の悩みを出しやすくアドバイスをもらえる機会であり、色々な事を学べたという声が多くあった。</p> <p>若い職員同士の交流が生まれるように、「若手部会」を設立し、若い職員通しが保育の悩みなどをお互いに話せる環境を作ってきた。</p> <p>職員数の多い認定こども園なので、保育現場だけでなく、給食室、事務所、バスなどの運行管理にかかわるさまざまな職員の意見が反映できるように、合同年度担当会議や、行事の事務局会議などを開くようにし、日ごろからのコミュニケーションをより一層大切に必要性を感じている。</p> <p>「新型コロナウイルス」の感染拡大の中、子どもたちの日常をできるだけ普通に守ろうと職員で話し合いを重ねた。年度末の保護者行事が次々と中止となる中で、今年度も卒園のお祝い等節目の行事は、三密を避け新しい形式で行った。</p>
<p>研修・研究の充実</p>	<p>新型コロナウイルスの影響で、外部研修は難しかったが、オンライン研修など取り組み、可能な限りで研修に参加した。それぞれが、学んだことを日々の保育に生かしている。また、中堅職員を中心としたキャリアアップ研修では、マネジメントや保護者支援などで各園の情報に触れ、新たな学びとなっている。</p> <p>また、絵本部会、散歩部会、童謡、わらべ歌部会を作り、1年間を通して保育の質を上げる取り組みを今年度初めて行った。</p> <p>食物アレルギーの子どもが増えている現実がある。職員会議など</p>

	<p>で、アレルギーの多様性を管理栄養士から学ぶ取り組みを行った。</p>
<p>健康・安全・衛生管理への配慮</p>	<p>健康・衛生管理面では、昨年同様「新型コロナウイルス」の感染により、手洗い、うがいがクローズアップされ、うがいと手を洗う習慣の徹底を図った。家庭にも協力をよびかけ、それによりインフルエンザやノロウイルスなどの感染症はほとんど見られず、子どもたちの健康を維持することができた。しかし感染拡大につれて、手指消毒だけでなく、施設や備品、バスなどの消毒など職員の負担が大きく増えた。ただ、1歳児クラスに限っては5月～6月にかけて、嘔吐、下痢が流行してしまい、半数の子どもが欠席という事態になり、保育参観、クラス会を延期した。</p> <p>また、オミクロン株の拡大により、年度途中から、3才児からも、給食、昼寝の時以外はマスクの着用をするようにした。子どもの顔の表情が見えず、より子どもの様子を観察するように意識してきた。</p> <p>避難訓練（火災、地震、洪水）不審者訓練を定期的に行い、非常事態にスムーズに対応出来るよう行ってきた。</p> <p>しかし、昨年3月に、保護者駐車場から園に向う間に、不審者が現れる事件があった。園内の防犯対策は行ってきたが、駐車場までの防犯については、意識が向いていなかったと反省し、防犯カメラを園内、保護者駐車場に設置した。また、市役所に働きかけ、保護者駐車場から園までの街灯の本数を増やし、明るいライトに変更した。その他、夕方に、駐車場から園までの間に男性職員を配置し、防犯対策を強化してきた。</p>
<p>保護者・地域との連携と支援</p>	<p>地域子育て支援事業として「うさぎの広場」を10年近く取り組み、「赤ちゃんのつどい」も3年目に入り、参加者も少しずつ増えてきている。</p> <p>子育てが初めてのお母さんたちの悩みを聞いて助言をしたり、赤ちゃんの接し方やあそびを体験してもらう取り組みである。今年度も、新型コロナウイルスの影響で、人数制限で、感染対策をしながらの開催だったが、毎回、募集定員は埋まり、その中で、回数を重ねるごとに親同士、あるいは親と職員が気軽に話し合える場になった。</p> <p>令和元年4月から幼稚部の各地域班から運営委員を選出し、幼稚部保護者による運営委員会が始まった。これは、前身の保育生協が大事にしてきた保護者の活動・交流・保育や行事への積極的な参加を認定こども園が引き継ぎ、さらなる発展を目指す組織である。</p> <p>昨年度は、新型コロナウイルスの影響で、ほとんどのイベントを中止になったが、今年度は、今まで行わなかった「お父さんと遊ぼ</p>

	<p>う森林公園」を 11 月に実施する事が出来た。保護者の「感染対策を行いながらも出来る取り組み」を考えた結果のイベントであった。</p> <p>ホームページは園を広く知ってもらい地域の方とつながる大切なツールなので、新たにホームページ担当の職員を決め、更新もできるだけ行うようにした。「赤ちゃんのつどい」や「うさぎの広場」の情報、園の見学会などのお知らせも載せるように心がけた。</p> <p>夏まつりは、今年度も新型コロナウイルスの影響で、例年のような盛大な夏祭りは行えず、子ども達だけで行う「子ども祭り」に変更をした。職員が中心になり、アイスやお菓子を販売し、子ども達もやぐらの上で先生や友達と楽しそうに踊る姿が見られた。今年度は、新たにヨーヨーパンチも販売し、子ども達の笑顔が多く見られる事になった。</p>
--	---

4、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
幼保連携型認定こども園としての教育・保育の推進	<p>乳児クラスが 2 階にあるため、乳児の日常の姿が伝わりにくい面がある。乳児の安定した生活を守りつつ、幼児クラスとの交流をいろいろな場面で広げていく。</p> <p>また、幼児の年度別会議はほぼ週 1 回行っているが、乳児のクラス会議は不定期だったので、定期的に開けるように会議中の見守り体制を整え、日常の保育の振り返りを大切にしていく。</p>
教職員の資質向上	<p>子ども理解を深めるために、広い視野を持ち、さらに積極的に研修研究活動に取り組めるように外部研修や講師を招いての研修に取り組むたいが、新型コロナウイルスの影響で難しいので、オンライン研修などを積極的に取り組んでいきたい。</p> <p>園内研修の内容が固定化されつつあるので、視野を広げ充実を図る。</p> <p>今年度も、職員が学びたい部会を作り、保育の質を高める取り組みを行う。</p> <p>年間個人目標を全職員に書いてもらい、半年、一年ごとに、自分の目標に対して振り返ってもらいながら、保育の質を高める取り組みを行っていく。</p>
子育て支援の取り組みの充実	<p>専任の職員を配置し、「うさぎの広場」と「赤ちゃんのつどい」の内容をリフレッシュして、子育てを楽しめる雰囲気を作っていく。</p>

	<p>また、プレ保育を火曜日、木曜日、金曜日クラスで行い、保護者支援をより積極的に行っていく。</p> <p>保護者同士の交流、仲間づくりを目指し、地域に開かれた園として取り組む。</p>
食育の推進	<p>乳児クラスだけでなく幼児クラスの子どもたちの給食時間の様子を時々見に来てもらい、メニューや食材の話をしてもらい、食への興味関心を広げる。</p>
保護者参加	<p>今までは、幼稚部運営委員会だけで行っていた「お父さんと遊ぼう」などの行事を保育部の保護者にも参加してもらう事になった。名前も「子どものその幼稚部運営委員会」から「子どものその運営サポート委員」に変更し、幼稚部、保育部の垣根を越えて、職員と一緒に子ども達の為に、協力して行っていく中で、父親の子育てへの参加を図る。</p> <p>昨年、保護者参加で行えなかった夏祭り、親子その祭り、保育参観、など感染対策を行いながら行い、保護者同士の親睦を深める。</p>

以上の通り報告します。

令和4年（2022年）3月31日
 子どものその幼保連携型認定こども園
 園長 山下 勝